

## 小学校図画工作科の学びが豊かになる 表現・鑑賞指導に関する一考察

—広島大学附属東雲小学校図画工作科の実践を通して—

三 梶 正 典\*

(2018年1月15日 受理)

### One Consideration about the Expression and Appreciation Instruction that Learning of the Elementary School Drawing and Handicrafts Department Becomes Rich —Through Practice of Shinonome Elementary School Attached to Hiroshima University—

Masanori MIMASU\*

This study suggests the way of expression and appreciation activity to do learning through the educational practice that teacher Shinichi Amano worked on a Shinonome meeting (2017) for the study of the Shinonome Elementary School drawing and handicrafts department attached to Hiroshima University wealthily.

**Keywords:** Active appreciation アクティブ鑑賞, Mandaras マンダラ, Expression and appreciation instruction 表現・鑑賞指導

#### 1. はじめに

広島大学附属東雲小学校は、広島大学附属東雲中学校と隣接しており、筆者が12年間、中学校に勤務していたこともあり、小中連携の関係で広島大学附属東雲小学校現図画工作科教諭の天野紳一（以降、天野）とは連携研究の中で授業交流を常に行っていた。特に鑑賞領域については、「アクティブ鑑賞」と銘打って、より能動的に児童が鑑賞活動に取り組むことが出来る教材開発を行っていた。当時、美術・図画工作科の活動において表現活動と鑑賞活動が同等な時間の取り扱うことの必要性が求められ、独立した鑑賞活動も合わせて奨励され、アメリカ・アレナスの「対話による美術鑑賞」<sup>1)</sup>が教育現場の中で導入され始めた時期であった。「アクティブラーニング」の指導方法も今日のように大学教育にも推奨され始める随分と以前である。天野の鑑賞教材の特長は、小学校低中高学年を通して美術館などに所蔵されている世界や日本の名画を題材にしている点である。ややもすると学習指導要領を逸脱している感もあるが、そこは附属学校ならではの範疇で、その題材設定によりアクティブ・ラーニングの目的とされている児童が主体的に参加し、仲間と深く考えながら課題を解決していく姿を多く見ることが出来た。本論文では、天野の平成29年度の東雲研究会に向けての教材研究と授業実践を通してより学びを豊かにする表現・鑑賞指導のあり方を提案することが出来ればと考える。

---

\* 広島女学院大学人間生活学部幼児教育心理学科教授

## 2. 学びを豊かにする授業

天野が勤務する広島大学附属東雲小学校の2017年度の研究テーマは「学びを豊かにする授業の研究」。図画工作科の学びは「表現」と「鑑賞」。その表現活動は表現者による周囲の環境への様々な働きかけやそれから受ける影響のなかで展開されるものであるし、鑑賞の学習を通して得た知識やものの見方などが表現活動として表出する。図画工作科が目指す「豊かな学び」で「表現」と「鑑賞」の双方に共通し、欠かすことのできない資質・能力を「発想の能力」とし、過年度まで取り組んできた「鑑賞能力の育成」「発想や構想び能力を引出高める授業デザインの在り方」で実践してきた成果と課題を踏まえながら「学びを豊かにする授業」の研究に取り組んでいる。

## 3. 図画工作科における豊かな学び

広島大学附属東雲小学校の図画工作科が目指す学びが豊かになっている児童の姿は、自分らしい表現に向かって次々と発想が生まれ、また新たな発想へと連鎖していく姿である。図1はそれをイメージしたもので「発想の能力」を中心として「主体性」「多様性」「協働性」と関わらせながら児童の学びが豊かになっている様子を植物の成長に例えている。「造形的レディネスの土壌」は「主体性」を蓄えた種子（学習者＝児童）が表現や鑑賞の学習において影響を受ける可能性のある様々な物事・人的環境を指している。この土壌が豊かに整備されて初めて種子は安心して発芽し、その後の成長も保障される。「主体性」は「自分らしさ」とも言い換えることができる。個々の造形的なモチベーション、様々な体験を通して得られた知識や技能、自分なりの見方、感じ方などである。眠っている種子に発芽のきっかけを与えるのが（水＝発想転換スイッチ）。授業の内容に置き換えると「効果的な導入」になる。この「発想転換スイッチ」は学習過程全体を通して様々な形で存在するが、発想が生まれ、繋がり、広がっていく連鎖の中で、茎が伸び、葉を茂らせ、やがて「多様性」に満ちた花を咲かせる。その過程で「協働性」を発揮しながら、他者や異なる環境と関わることでより「豊かな実り」「豊かな学び」につながる<sup>2)</sup>。



図1

#### 4. 研究授業の実際

上記のテーマを受け、「学びを豊かにする授業」の題材として天野が取り上げたのが、「マンダラ」。一見「マンダラ」はインド、中国、チベットといったアジアの国や地方をはじめ洋の東西を問わず、信仰の対象として、神の象徴として表現されてきた。一般的には児童には鑑賞や表現の対象としてはこれまで扱われてこなかった題材である。しかし、天野が注目したのは現代の作家（さくらももこなど）が描くオシャレな明るいカラフルなマンダラ模様。彼はこのひたすら楽しく感じる新しい感覚のマンダラとの出会いを通して「こんな風に自由に夢を表現し、空想の世界に耽ることがどんなに素敵だろう！」と感じ、研究授業でのマンダラの題材を決めたのである。そして「発想の連鎖を生み出す授業デザインの在り方を探る」手立てとしてマンダラの題材はその製作過程において児童は、次々と発想の連鎖が生まれてくるに違いないと考えた。授業では、マンダラそのものの持つ構成のパワーを児童に鑑賞させながら、豊かに発想を広げ、自分なりのイメージから生まれたモチーフや色を使ってオリジナルのマンダラを描いていく表現題材とし、以下の指導目標を設定し、授業を実践した。発想の能力は、東雲小学校の図画工作科の学びにおける「思考・判断」を担う部分であり、またそれは新学習指導要領に示された資質・能力の育成にも対応できるように構成されている。以下学習指導案。

#### 図画工作科学習指導案<sup>3)</sup>（一部抜粋）

指導者 天 野 紳 一

日 時 平成29年11月18日（土） 第3校時（13：15～14：00）

年 組 小学校第6学年1組 計31名（男子15名 女子16名）

場 所 小学校図工室

題 材 MANDARA WORLD ～発想の宇宙へ

題材について

題材の概要と設定理由

私たち日本人にとって最も馴染みがあるのは仏教の世界で出会う「曼荼羅」であろうが、同じよう世界観を表した図形は古くから世界中のあちこちに存在する。インド、中国、チベットといったアジアの国や地方をはじめ、ヨーロッパ、イスラム諸国、アメリカ大陸に至るまで洋の東西を問わず、あるは信仰の対象として、またある時は神秘の象徴として大切にされてきた。この事実こそが取りも直さずマンダラのもつ普遍性を証明している。きっと人は根源的にマンダラに癒やされ、マンダラを欲するである。私とその魅力に強く惹かれたのは、『ちびまる子ちゃん』でおなじみのさくらももこさんの描いたマンダラ<sup>4)</sup>に出会ったことがきっかけであった。宗教的な「曼陀羅」には何となく畏敬の念が付きとい、見る（拝む）ものではあっても、自分で描く対象にはなり得なかった。しかし、さくらさんの描くマンダラはぐっと身近で、カラフルで、ひたすらに楽しい。（こんな風に自由に夢を表し、空想の世界に耽ることができたらどんなに素敵だろう！）この思いがマンダラ題材化への第一歩あった。本年度、図画工作科・美術科では発想の連鎖を生み出す授業デザインの在り方を探ることを究テーマとしているが、マンダラの製作過程では次々と発想の連鎖が生まれているに違いない。本題材は、マンダラ構図のもつパワーを借りて豊かに発想を練り広げ、自分なりのイメージから生まれたモチーフや色を使ってオリジナルのマンダラを描いていく表現題材である。発想の能

力は図工作科の学びにおける「思考・判断」を担う部分であり、新学習指導要領に示された資質・能力の育にも対応できるよう構成した。

#### 児童の実態

本学級の児童は、実は低学年の頃からマンダラに親しんでいる。当時の担任が、余暇に楽しく集中できるものを…とマンダラ塗り絵を取り入れたところ大好評だったようで、今回も「研究会でマンダラやるよ。」と予告したところ、多くの児童が高い関心を示した。造形的モチベーションは十分である。ただこれは決められた枠の中を色鉛筆で塗るという単純作業であり、創造的な思考・判断のおもしろさというよりも、集中して無心に取り組むことによる一種のヒーリング効果に魅力を感じてのことであろう。9月に投げ入れた題材『想像の絵～1枚の写真から』では、運動場に埋められたタイヤの遊具の写真をもとに2時間ほどの間途切れることなく次々と発想を展開した児童がいた一方で、具体的なモチーを思い付くことができず、色だけで写真の周りを埋めていく児童もいた。この学年の図画工作の授業担当して今年で3年目を迎えるが、表現への意欲は高いものの、「発想」に限ってはこれまでになく停滞傾向にあると感じている。また、我々は鑑賞能力の育成を目指した過年度の研究の中で、パーンズ（Michael J.Parsons）が示した「絵画鑑賞における美的認知上の発達段階」（『絵画の見方1987,Cambridge University Press）をもとに各期の児童の鑑賞に関する具体的な様相を想定した。このような絵の見方が表現の傾向にも反映されるという前提で本学級の児童の実態を捉えた時、多くは第2段階にあり、一部の児童が第3段階へのステップを登り始めた状態にあると推察できる。

#### 学びを豊かにするための手立て

本題材で児童の発想を引き出し、さらに発想の連鎖を生み出すための手立ては次の通りである。

##### （1）マンダラの構図がもつエネルギー

発想は「思考」と「判断」の繰り返しの中で生まれてくるものであり、そのプロセスは、「拡散」「集中」の連続とも言い換えることができよう。一方で、マンダラの構図がもつ原則的な特徴は、「称性」と「回転性」である。「対称性」は調和や秩序を生み出し、「回転性」は求心力やエネルギーを現する。このような構図の特徴自体が、発想を生み出し、それを連鎖させる効果を持つと考えている。マンダラの構図にはまるで台風の目のように明確な中心が存在する。そこから外に向かって「拡散していくと捉えるのか、中心に向かって「集中」していくと捉えるのか、その見方、感じ方は児童一人一人に委ねられるであろう。だが、いずれにしても児童は必ず構図の中心を意識し、じっと見つめることになろう。そこに何を描くのか、あるいはどのような色を与えるのか、それが発想の第一歩であるあとはマンダラの構図が供給し続けるエネルギーに自然に思考を委ねれば、次々と新たな発想が生まれてくるはずである。例え一つ一つの発想が拡散的で無秩序であったとしても、最終的にはマンダラの図の対称性がそこに秩序と調和を与えてくれる。このようにして出来上がった作品は、そのまま一人一人の発想のプロセスを映し出す鏡になろう。作品鑑賞を通して児童は自らの思考と改めて向き合い、それを読み解くことでまた新たな思考が始まるものと考えている。

##### （2）2つのアプローチ～色から迫るかモチーフから迫るか

本題材では、色とモチーフの双方を取り入れて自分なりのマンダラを描いていくが、そのどちらか始めるかは個々が選択できるようにする。実態で述べたように児童は既にマンダラ塗り絵を経験しており、その心地よさを知っている。もしも描きたいモチーフがすぐに浮かばない場合には、色

を塗るところから始めればよい。無意識に選んだ色であってもそこには必ず理由があり、色を塗っているうちに描きたいモチーフのビジュアルイメージが浮かんでくるものとする。

### (3) 小さなモチーフと描画材～技能の壁を取り払う

第2段階にある児童は、描画の技量に対して必要以上にナーバスになっている場合がある。一般的に認知されている物のフォルムが上手く描けない、リアルに描きたいのに描けない…そのような能力的なジレンマは発想の広がりを阻害する大きな要因になってしまう。本題材では、そのような技能な壁を極力取り払う形で、発想に焦点化したいと考えている。そのため、色紙大(30cm×30cm)の紙を用い、マンダラの構図の中の小さな一つ一つの「窓」に、サインペンでモチーフを描いていくようにする。細部までリアルに描くのではなく、大まかなシルエットやイメージだけで表現することで、児童の表現活動の停滞を回避したい。

#### 指導目標

- 1 マンダラに出会い、色や形などの造形的な視点をもとに自分なりに分析したり、「対称性」や「転性」といった構図の特徴を理解したりすることができるようにする。(知識及び技能)
- 2 構図の特徴をもとにして描きたい色や形を思い浮かべ、発想をつなげたり広げたりしながら、自分なりに工夫して表現することができるようにする。(思考力・判断力・表現力等)
- 3 自他の作品をじっくり鑑賞し、それぞれの表現の多様性とそのよさに気づくとともに、思いのまにかつくり出すことの喜びを味わうようにする。(学びに向かう力・人間性等)

#### 指導計画(全6時間)

第一次 マンダラと出会う(鑑賞) 1時間

第二次 自分のマンダラを決めて下書きをする 1時間

第三次 製作する(本時1/3) 3時間

第四次 完成作品を鑑賞する 1時間

#### 本時の目標

構図の特徴をもとにして描きたい色や形を思い浮かべ、発想をつなげたり広げたりしながら、自分なりに工夫して表現することの楽しさを味わうことができる。

#### 準備物

マンダラの構図(各自で前時に製作したもの)、水性サインペン(黒字、細書き)

水彩絵の具セット…絵具、水入れ用容器、パレット代わりの皿、筆(面相筆、平筆等各種)

学習課題と製作への意識の持ち方を示す掲示物、学習ふりかえり用のワークシート



## 学習の展開

学習活動と内容	指導上の留意点（◆評価）
<b>1 導入～学習課題と方法を把握する（10分）</b> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;">自分なりのマンダラ・ワールドを描き始めよう！</div> <input type="checkbox"/> 本時の学習課題と、製作の進め方を知る。 ① マンダラの「窓」の中に思い付いた物を自由に描いていくこと。 ② 中心から描き始めること。 ③ サインペンを使ってはっきりと描くこと。（下書きは必要ない） ④ 詳しく細かく描く必要はなく、その瞬間の思い付きやイメージを大切にどんどん描くこと。 ⑤ 描きたい物が思い付かない時は、色塗りから始めてもよいこと。	○ 本時の学習課題を伝える。  ○ 製作に入る児童が自由に発想し、描くことを楽しむことができるような環境をつくる。 ・ 一人に1本のサインペンを用意する。 ・ 色塗りから始める児童がすぐに使えるように、彩色用具の準備をしておく。 ・ 製作に没頭できるような机の配置をする。 ○ 製作の手順と方法をわかりやすく伝える。 ・ 中心から外に向かって放射状に発想を広げていく意識をもつことができるよう、マンダラ構図の掲示物を使って、図式化して示す。 ○ 特定のテーマをもとに描くというよりも、描いた作品から自分なりのテーマを見つけ出す活動になることを伝えておく。
<b>2 展開～各自で製作する（30分）</b> <input type="checkbox"/> マンダラの構図をもとに思い浮かんだイメージを表現する。 ・ シンプルにモチーフを描き広げる。 ・ 思い付いた好きな色を塗り広げる。	○ 児童の製作の様子を見守り、適宜助言したり、話し相手になったりしながら、発想の喚起を促す。 ◆ 自分の描きたいモチーフや、イメージする色を思い付き、表現し始めることができたか。 ◆ 時間いっぱい製作に没頭できたか。
<b>3 終末～本時をふりかえる（5分）</b> <input type="checkbox"/> 自分の作品を見ながら、本時のふりかえりを書く。 ・ 描きたい物を思い付くことはできたか。 ・ どのようにイメージを広げていったか。 ・ 描くことを楽しんだか。	○ 本時で浮かんだ発想を次時へつなぎ、製作への期待をもって本時を終えることができるように、簡単なふりかえりをする。 ・ ふりかえり用のワークシートを配布する。 ・ 本時の活動を賞賛し、価値付ける。

## 5. 考察

研究会での公開授業のテーマは「自分なりのマンダラ・ワールドを描き始めよう！」。指導目標は、「構図をもとにして描いた胃色や形を思い浮かべ、発想をつなげたり広げたりしながら、自分なりに工夫して表現することの楽しさを味わうことができる」。指導計画全6時間の内の3時間目、天野が本題材を選ぶきっかけになったさくらももこが描くマンダラの作品『COJI-COJI』<sup>5)</sup>と『COLORING MANDARAS』<sup>6)</sup>の鑑賞を行い、構図（マンダラの窓）から自分のマンダラを決めて色紙に描き終えた段階で本時を迎えていた。十年来、天野の授業を見てきたが、一貫して彼の授業は、題材やテーマに対しての「熱い思い」が込められている。それは、彼の選ぶ題材は、図画工作科の教科書は使用するものの、指導計画は必ずしもそれに沿ったものではなく、彼の生活環境から必然的に絞り出されてくるものだからである。それは、毎回導入の時に感じられ、その思いは、天野も前述しているようにしっかり児童にも届いていると感じる。導入～学習課題と方法を把握させる中で、世界の様々なマンダラを映像を通して鑑賞させ、その色と形の不思議さを体感させ水性サインペンを使って製作（自分のマンダラの「窓」の中に思い付いたものを自由に描く）に向かわせた。「詳しく細かく描

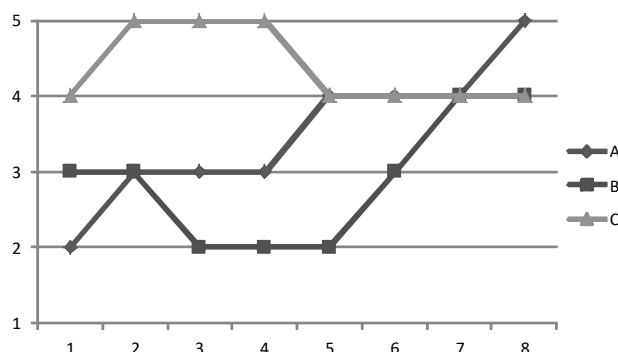
く必要はなく、瞬間に思いついた形をどんどん描こう」などと製作の手順をきちんと伝えていたのにも関わらず、「それでは製作を始めて下さい」の合図とともにまるで時間がとまったように児童の手は動かず、その時間はしばらく続いた。手が動かない児童の要因は、いくつか考えられたが、要するに「どう描いていいのかわからない」状況なのである。通常の公開授業研究会ではあまり見ることが出来ない状況でもある。一般的にはお決まりのように質問に対しては手を挙げ、活動に対しては積極的に動き取組む光景をよく目にしてきた。ある意味、それが善し悪しで言う「善い」授業展開と受け止めてしまいがちである。この「止まった時間」は、天野にとっても想定されていた展開に思えたが、「公開授業の中で良く思いきってこの製作展開を試みたものだ」と焦りにも近い授業者の心境でこの「止まった時間」を見ていた。すると一人また一人と手を動かし始めその動きが少しずつではあるが児童全体に広がっていった。安堵にも近い思いにもなったが、一人ひとりのアイデアが一人ひとりの個性に応じてゆっくりと時間の差と共に浮かんで出てくる様子を見ることが出来た。何か不思議な新鮮な気持ちの良い瞬間でもあった。本考察では、製作の展開の中で、筆者が授業をとして気になった3名（直ぐに手が動き出した児童A、途中から手を動かし始めた児童B、最後までなかなか出た手が動かなかった児童Cに焦点をあてる。

下表1、表2は、3名の児童が天野の研究授業終了時の作品と天野が授業終了時に実施したアンケートの結果である。アンケート項目は授業の流れに沿って8項目、5段階表記で記入させた。

表1 アンケート項目

製作過程	何も浮かばないよ	ほんやりと	こんな感じかな	よしひらめいた	描けるぞ
1. 自分の曼荼羅を選んだ時					
2. 自分の曼荼羅を色紙を写しながら					
3. 自色紙に写し終えた曼荼羅を見たとき					
4. 曼荼羅を鑑賞した時（伝統的）					
5. 曼荼羅を鑑賞した時（曼荼羅アート）					
6. 曼荼羅を鑑賞した時（さくらももこ）					
7. 「遠く絵」の作品を見た時					
8. 曼荼羅の中に最初にモチーフを描いた時					

表2 アンケート結果集計表（児童A・B・C）



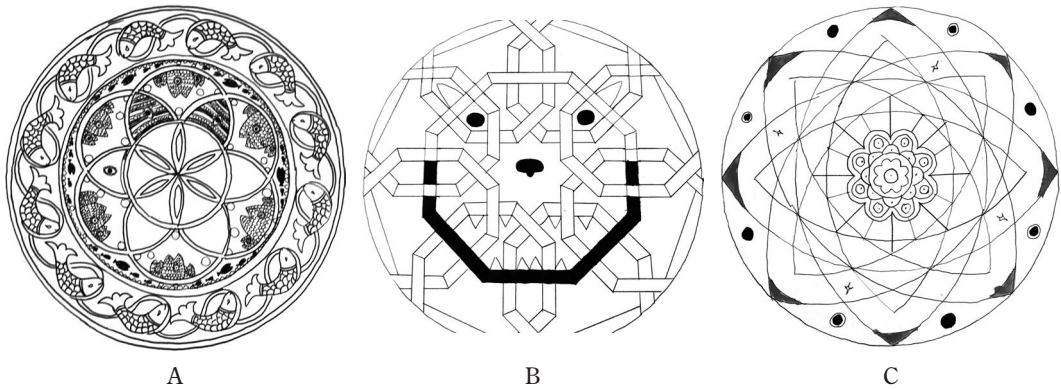


図2 公開授業終了時の作品

図2は、ABCの児童の公開授業終了時の作品である。Aは、図画工作科の授業に対する興味関心が高く、いつも積極的に取り組むことが出来る児童であるが、最初は、天野が題材として提示した曼荼羅の作品に対してはあまり興味を示していなかった。しかし、授業の展開の過程で自分が表現しようと選ぶ過程あたりから徐々に表現に対する意欲が高まっている。製作開始後、最も早く手が動いていた児童の一人である。Bは、日ごろから授業全般に意欲が少なく、集中力が続かない傾向がある児童である。授業の最初の過程では興味の起伏があり、製作開始前にはかなり意欲的には低い状況であった。しかし、最初はまったく手が動いていなかったが、自分が選んだ曼荼羅の模様から何かしらの顔がイメージ出来たのか、目と鼻を描き出してからはどんどん手が動き始めていた。Cは、AやBと比較すると目立って授業の表現・鑑賞活動に対して高かったり低かったりする児童ではないが、今回の曼荼羅の題材に対してはとても高い関心を持っていた。しかし、曼荼羅の作品鑑賞から自分の曼荼羅を選び、表現する過程あたりから何かしらの壁にぶつかり、手を少しずつ動かそうとしていたが、結局思うように進まず授業を終えた。数値的には決して低くはない自己評価ではあったが、アンケートには「自信がなくなった」と表記していた。天野も授業終了時にCの感想に対しては、少々戸惑っていた。

## 6. まとめ

公開研究授業は、最初の導入の時の曼荼羅作品鑑賞の児童の盛り上がりから一転し製作に入ってから何かしら「止まった時間」とのギャップに戸惑いを感じたが、次第に少しずつではあるが描き始めることが出来る時間の流れは、まるで真っ赤な太陽が西に沈み、そこから一番星が見え始め、徐々にその数が増していく夜空の景色と重なって見えた。多かれ少なかれ、今の教育現場は一気に無数の星が輝き始める情景を望んでいるのかも知れない。多くの成果を短時間に求めているのではとの思いとも重なった。その意味では、今回の天野の授業は、星がちらほら出始めた段階で終了したものではなかっただろうか。その後、いくつか経過作品(図3)を見せていただいた。卒業行事を控えて曼荼羅作品については多くの児童が完成までには至っていなかったが、研究授業終了時には想像もつかないくらいたくさんさんの気づきが描かれ、着色へと進んでいた。天野が求める「学びが豊かになっている児童の姿」が写った。ちらほら輝き始めた星が、たくさん夜空に輝いている情景も感じた。



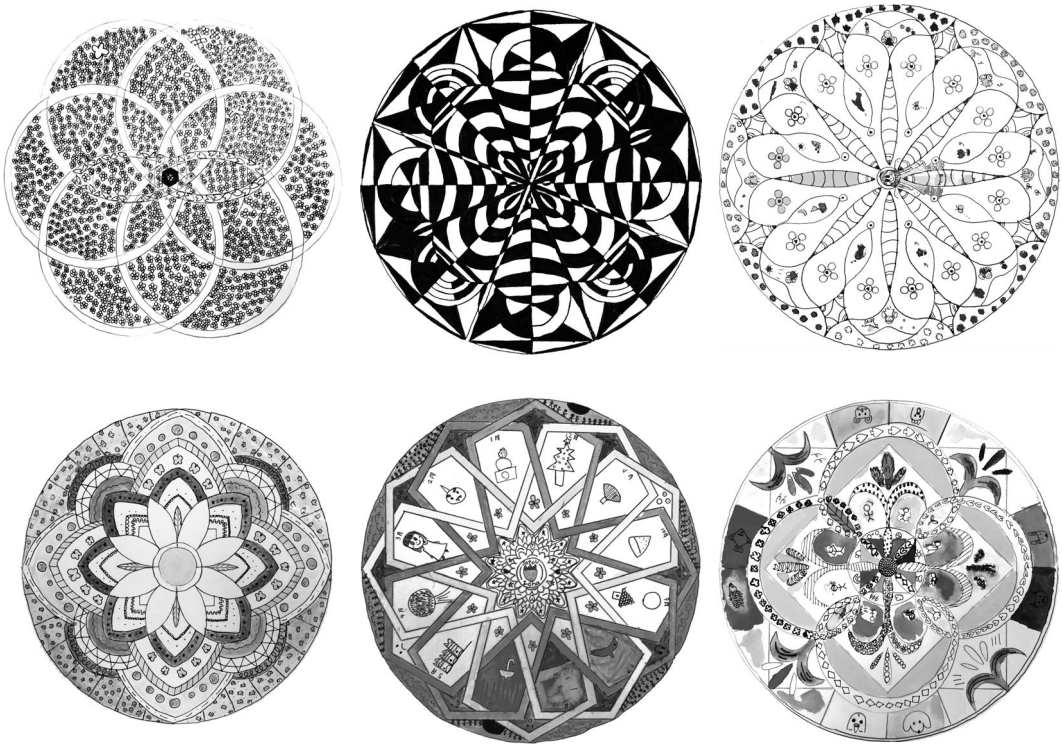


図3 公開授業以降の制作過程の作品

中でも目を引いたのがBの作品展開（図4）。色塗りが思い切りよく進んでいた。下書きの時に記入した「よしひらめいた」から「描けるぞ」の言葉が聞こえてくるような感じがした。またAについては、しっかりと下書きを完成させ、着色へと進んだが、思うように進めず、再度下書きからやり直したと聞いた。Cについては「よしひらめいた」から「何も浮かばないよ」が行ったり来たりしている展開でその後もしっかりと描き込まずに着色へと進んでいるようであった。アンケートの項目は「9. 曼荼羅の中に最初の色を塗った時」「10. モチーフを描きながら」「11. 色を塗りながら」と続く。まだ児童の書き込みはなかったが、児童のその後の制作作品

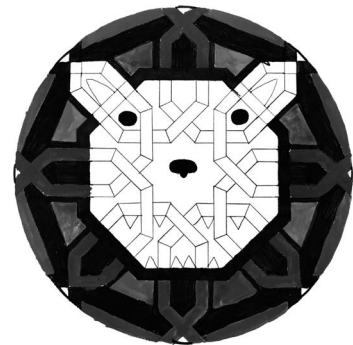


図4

を見るに天野が目標とした「描きたい色や形を浮かべ、発想をつなげたり広げたりしながら、自分なりに工夫して表現することができる。」を満たすアンケート結果が数値として表れてくると実感した。天野の授業分析の研究は、今回始まったばかりである。「名画の鑑賞を通して様々な発想を引き出す」授業展開が天野メソッドと考える。天野が発達段階に関わらず、常に児童に対して名画の鑑賞指導をしているのは、教室の展示を見てもその姿勢は伺える。彼の授業の魅力は、その「名画鑑賞」の入り口が常にあるからだ。児童達はその入り口からそれぞれが楽しんで鑑賞する道を見つけ

ている。今回の授業も「曼荼羅」という入り口から様々な楽しみ方を見つけていた。そのことはほとんどの児童が授業の最初の段階で「よしひらめいた」「描けるぞ」と答えている。今後は、今回の題材終了後に天野自身が示す授業分析を合わせ、「曼荼羅」を題材とした表現・鑑賞活動が「豊かな学び」に繋がったのがという成果と課題をまとめていきたい。さらに引き続き天野の様々な授業の研究を続けながら天野メソッドをより具体的にまとめ、その魅力を明らかにしていきたい。

## 引用文献

- 1) 上野行一監修 『まなざしの共有』 淡交社 2001 p.20
- 2) 天野紳一他 『平成29年度 東雲研究会実施要項』 広島大学附属東雲小学校・中学校 2017
- 3) 上掲書(2)
- 4) さくらももこ 『ももこの絵ものがたり感 COJI-COJI』 角川書店 1999
- 5) 上掲書(4)
- 6) スザンヌ・F・フィンチャー著、正木晃訳 『COLORING MANDARAS』 春秋社刊 2005

## 参考文献

- 天野紳一他 『平成28年度 教育研究 初等教育』 広島大学附属東雲小学校 2017
- アメリカ・アレナス著 福のりこ訳 『なぜ、これがアートなの』 淡交社 1998
- 上野行一 『私の中の自由な美術―鑑賞養育で育む力―』 光村図書 2011